

原稿募集

『大学史研究通信』第20号は2000年6月1日に発行予定です。現在の研究紹介、文献案内、会員主催の行事のお知らせなど、どのようなものでも結構です。次号は第20号という記念すべき号ですので、皆様からの投稿を心よりお待ちしております。

『大学史研究通信』バックナンバーを希望者に頒布いたします。

『大学史研究通信』第14号～現在発行号まで希望者に頒布いたします。

80円×部数+郵送料(1部の場合90円、2部以上は120円)分の切手を同封の上、編集担当進藤宛までご請求下さい。

編集後記 『通信』第19号をお送りいたします。研究の発行を引き継いだときは、新しい仕事を引き受けた意気込みもあって順調に発行していましたが、1999年は諸事情のため「息切れ」してしまい、思ったように発行ができませんでした。今年度の編集方針は、「とにかく情報をまめにおたえする」としたいとおもいます。(進藤記)

『通信』編集は事務局・進藤修一が担当しております。

連絡先 〒562-8558 大阪外国語大学外国語学部 進藤修一研究室内

TEL/FAX 0727-30-5355

EMAIL sshindo@pop13.odn.ne.jp

大学史研究会事務局

〒192-0003 八王子市丹木町1-236 創価大学教育学部 坂本辰朗研究室内 大学史研究会

TEL 0426-91-4602 FAX 0426-91-9309 EMAIL sakamoto@s.soka.ac.jp

大学史研究会事務局員(五十音順)

阿曾 昭	明裕	(筑波大学大学研究センター)	飯野 靖夫	靖夫	(日本鯨類研究所)
大川 一毅	善仁	(早稲田大学)	木戸 裕	裕	(国立国会図書館)
尻玉 修一	修一	(帝京大学)	坂本 辰朗	辰朗	(創価大学)
進藤 修一	修一	(大阪外国語大学)	塚原 修一	修一	(国立教育研究所)
橋本 敏市	敏市	(学位授与機構)			

大学史研究通信

New Series, No. 19, 31. March. 2000.

第19号の内容: 新入会員の紹介・会員住所・所属変更のお知らせ・新入会員自己紹介・大学史研究会 2000年度第一回例会「瀧井一博著『ドイツ国家学と明治国制』: シュタイン国家学の軌跡』(ミネルヴァ書房、1999年)を述べ」のお知らせ・白線クラブの月例会の予定について・新刊紹介・白線クラブより図書・資料の寄贈のお知らせ・2000年度大学史研究セミナーのお知らせ・『通信』編集担当よりのお詫び、お知らせ・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

新入会員(氏名五十音順、敬称略)

以下の方々が新たに入会されました。

青柳 亮子(一橋大学大学院)

専門領域 1. ドイツにおけるシュタイナーの教育思想受容の思想史・社会史的研究  
2. (上記に関連して) シュタイナー教育における教師教育・自己啓発活動  
3. (同じく) 父母の学校参加

吉野 剛弘(慶應義塾大学大学院)

専門領域 1. 旧制高等学校入試の研究  
2. 予備校の歴史の研究

会員住所・所属変更

大川 一毅 会員(住所変更)

新住所

鈴木 康史 会員(住所・所属変更)

新住所

電話は変更なし(0298-58-0721)

新所属先 〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学体育科学系(助手)

電話 [redacted] e-mailは変更なし [redacted]

## 新入会員自己紹介（氏名五十音順）

荒木 康彦 会員（近畿大学教養部）

関西学院大学の早島教授から、来年度「留学」についてのシンポジウムに参加して欲しいと企画されているので、入会の上、パネラーとしてシムポジウムに参加して欲しいとお勧めを頂きましたので、先般入会させて頂きました。というのは、1995年度にドイツ研究滞在中に、ドイツの大学で最初に学籍登録した日本人、即ち正式にドイツの大学に最初に「留学」した日本人は馬島（後に改姓して、小松）澄治なる人物であることを発見し、現在彼のドイツ留学の実体を一次史料に立脚して解明することに努めているからです。従来、幕末・維新期の日独交渉史の枠内で維新直後から廃藩置県までの政治昏迷期に俄かにドイツ風の軍事官僚制国家を確立することになった紀州和歌山藩の改革に参画した人々について調べてきました。特に、同藩にドイツ製の後装ライフル銃Zündnadel銃その他の武器を納入したどいつ貿易相カール・レーマン(Carl Lehmann 1831-74)、同藩の軍事教官として活躍したドイツの元軍人カール・ケッペン(Carl Koeppen 1833-1907)、ケッペンを助け、ドイツ語の兵学書を翻訳したとされる小松澄治(1848-93)です。レーマンやケッペンについては既に戦前から着目されており、最近も少しずつ研究が進められてきていますが、この時期の小松についての先行研究は殆ど無く、一次史料も全く未発見でした。小松は、廃藩置県後に明治政府に出仕し、「岩倉使節」の二等書記官として活躍し、晩年には司法省民事局長・横浜地方裁判所長を勤めた程の人物でありながら、若年期の小松については全くと言っていい程不明でした。しかし、この数年間、若年期の小松の一次史料の発掘に努めた結果、この時期の彼のプロフィールが明らかになりました。

長崎の外国人居留地にいたレーマンが、1867年に会津・和歌山両藩からのZündnadel銃の注文を得てドイツに向かう時、長崎の「精得館」でオランダ医学を学んでいた会津藩出身の小松（当時は馬島と称していた）はレーマンについて渡独し、1868年10月21日にハイデルベルク大学に学籍登録したことが分かりました。従来、ドイツの大学で最初に学籍登録した日本人は、1875年5月5日にハイデルベルク大学に学籍登録した赤星研造(1844-1904)とされて来ましたので、小松は正式にドイツの大学に最初に留学した日本人であることが確定された訳です。1999年1月に小松澄治のハイデルベルク大学留学130年を記念する学術講演会が同大学日本学科主催で行われ、私も招聘されて、小松のハイデルベルク大学留学の経緯について話して来ました。その後に見た日独蘭の一次史料の解説に現在では取り組んでおりまして、小松のドイツ留学及びその背後にあった幕末の政治的状況、それに複雑に絡んで来るレーマン等の居留地のドイツ人の動きを纏めているところです。

## 白線クラブより図書・資料の奇贈

白線クラブ会員である向山寛夫氏（國學院大學元教授・法学博士・弁護士）より、同氏の著作『東京学生消費組合史』（中央経済研究所、1984年）、『新潟高等学校（旧制）の学生騒動記録』（中央経済研究所、1996年）を、**大学史研究会で希望する会員に奇贈**していただけることになりました。前者は、1926年から1940年まで15年間存在した東京学生消費組合（早稲田大学、拓殖大学、東京帝国大学、立教大学、法政大学、明治大学、明治学院に支部を設立）の活動を、経営組織体として経済活動をおこないつつ、昭和初期の時代風潮を反映し、多かれ少なかれ左翼学生団体としての性格をおびていた特異な学生団体として実証的に分析した550頁を越える労作です。後者は、昭和年代初期の新潟高等学校におこったストライキなど三回の学生騒動の関係者による記録であり、特に1931年当時に秘密出版された「七月ストライキの経験」が復刻されています。

以上の二著について関心のある会員は研究会事務局の坂本までご一報下さい。

## 2000年度の大学史研究セミナーについて

本年度の研究セミナーは、志學館大学（鹿児島）において、11月下旬あるいは12月上旬に開催する予定で、現在、二見剛史会員にご尽力をいただいております。九州地区では久々のセミナー開催となりますので、課題研究、自由研究とともに、充実したものにしたいと存じます。詳細は決定次第、『大学史研究通信』などでお知らせいたします。

## 『通信』担当者よりのお詫び

『大学史研究通信』第18号を送付する際に、料金が90円のところを、80円切手を貼りつけて投函してしまいました。ほとんどの会員に「料金10円不足」の付箋とともに通信が届けられたことと思えます。心よりお詫び申し上げます。今後このような事故のないように努めてまいりますので、会員の皆様にご理解いただきたくお願いいたします。

訂正

『大学史研究通信』第16号の発行年月日が誤っております。

(誤) 30. April 1999 → (正) 31. March 1999

## 大学史研究会 2000 年度第 1 回例会のお知らせ

瀧井一博著『ドイツ国家学と明治国制 : シュタイン国家学の軌跡』(ミネルヴァ書房、1999 年)を読む

座長 : 寺崎昌男 (桜美林大学)

コメンテーター : 大石眞 (京都大学) 堅田剛 (獨協大学) 柴田隆行 (東洋大学)  
長尾龍一 (日本大学) 以上、五十音順・順不同

日時 : 5 月 27 日 (土曜日) 午後 3 時 30 分 ~ 6 時

会場 : 明治大学リバティタワー\* 6 階第 4 会議室 (Tel.03-3296-2377 直通)

\*JR お茶の水駅下車徒歩 7 分

この例会の開催は明治大学教職課程連絡会議のご協力により可能になったものです。

なお、例会終了後、午後 6 時 30 分より懇親会を予定しております。こちらの方にも多数の会員の皆様のご参加をお待ちしております。

### 白線クラブの月例会の予定について

4 月 21 日 (金) 午後 4 時より 「寮歌にまつわる話」(1)

宇都宮新氏 (松本・寮歌研究者)、橋本十三男氏 (一高・玉杯会長)、力丸英豪氏 (国書刊行会) ほか。

5 月 19 日 (金) 午後 3 時より 「寮歌にまつわる話」(2)

神津康雄氏 (山形)、坂田有三 (山口・長唄師匠)、浜谷資郎 (東京)、吉富達彦 (広島) ほか。

お問い合わせは白線クラブ (Tel.03-3204-7789) あるいは本多二朗会員まで。

## < 新刊紹介 >

寺崎昌男・別府昭郎・中野実（編）『大学史をつくる』東信堂、1999年6月刊  
早島 瑛（関西学院大学）

本書『大学史をつくる』の副題は「沿革史編纂必携」(Editor's Handbook for University History)である。このことから本書が『百年史』などの大学史の編纂を担当する関係者のために上梓されたことが分かる。本格的な書評は別に書かれることと考えられるので、ここではごく簡単に本書の内容を紹介し、ついで史料批判の問題に触れておきたい。

本書は5部構成。第1部「大学史編纂の動向」で日独英中4国における大学史の歴史が考察され、第2部「大学史編纂の体験を語る」で私立6大学と国立4大学の関係者の体験が語られている。これを読めば編纂事業の苦労がよく分かる。第3部が「大学文書館と創設への提言」、第4部が独伊米など「外国の大学文書館」の紹介、第5部「実践編」が「編纂のための Q&A」である。この「Q&A」は大学史編纂事業の入門書として有益である。

本書の「はしがき」に「大学沿革史の内容や資料の質、編纂の水準は、かつてなく上がってきている」とある(本書1頁)。しかし、この文章には留保が必要である。60年代から80年代にかけて執筆されて本書に採録された提言のなかに、いまでも未解決の問題が少なくないからである。その一つが大学史の史料に関する問題であり、これは史料批判の問題に直接に関連性をもつ。たとえば、第2部国立第3章『東京大学百年史』編纂の課程」で、執筆された内容に関し「裏を取る」ことの重要性が指摘されている(188頁)が、このことは校訂者が「執筆者と同じ史料を(校訂作業中)もう一度一から読み直す」(同頁)ことを意味する。しかし、裏を取る作業それ自体、決して編纂事業の次元で完結するものではない。それは歴史研究において永遠に継続する作業である。つまり「通史編」であれ「資料編」であれ、「裏を取る」ことの可能性は第三者、すなわち研究者に対して広く保証されなければならないのである。校訂者が校訂のさいに裏を取る必要を感じると同じ程度に、歴史家であれば誰でも「通史編」や「資料編」を読むとき、史料が適切に用いられているか否かを問題にする。ゆきとどいた史料批判がなされているかを具体的に問題にするのである。この意味で編纂事業で用いられた史料はすべて読者(研究者)に公開されなければならない。資料館の機能の一つはこの要請に答えることにある。単に保存のためにあるのではない。しかし、本書では(236頁を例外として)この観点からの発言が少ないように思われる。

この資料保存と文書館の問題は第3部展望第2章と第3章で触れられているが、これについては別に立ち入って論ずることにしたい。